

って「有」であり、「絶対無」の次元にまで究徹されていない。現存在がまだ「有」として〈見るもの〉に留まっているからこそ、その了解の対象が〈見られるもの〉なのである。

『善の研究』と「宗教的要求」

杉 本 耕 一

『善の研究』「第四編第一章 宗教的要求」は、次の一節で始まる。「宗教的要求は自己に対する要求である、自己の生命に就いての要求である。我々の自己がその相対的にして有限なるを覚知すると共に、絶対無限の力に合一して之に由りて永遠の真生命を得んと欲するの要求である」。この一節は、『善の研究』全体の中で見ると、やや異質な印象を与える。なぜならば、『善の研究』全体の基調としては、「自己」は、大体においてその「無限」の相において、即ち、その根底において宇宙と一であると言われるような「大なる自己」としてとらえられているのに対し、ここでは例外的に、むしろ「自己」の「有限」「相対」の自覚に立つて論が進められているからである。

本発表では、このような異質な一節に注目し、それが『善の研究』の中でどのような意味をもっているのか、また、もちうるのかを考えてみたい。具体的には、この「第四編第一章 宗教的要求」の『善の研究』全体の中の独特の位置を明らかにするとともに、『善の研究』の中にこのような例外的な章が含まれていることの意義について論じたい。

「第四編第一章」の『善の研究』全体の中での位置を明らかにするために注目したいのは、『善の研究』で論ぜられる「宗教」が、いわば二重の構造をもっているということである。

『善の研究』は、「第一編 純粹経験」「第二編 實在」「第三編 善」「第四編 宗教」という四つの編から構成されている。「第四編 宗教」において「宗教」が主題となるのはもちろんであるのだが、それに先立つ第一編から第三編においても、各編の最終的な結びの部分で、「宗教」に属する事柄が既に論じられている。本発表の関心事である有限相対の自己という視点は、もっぱら「第四編 宗教」でのみ出されるものであるから、「第四編第一章」の位置を知るためには、前者とは異なる後者に固有の立場を明らかにしなければならない。

第一編から第三編までの「宗教」は、「学問道德の本には宗教がなければならぬ、学問道德は之に由りて成立するのである」という言葉からも分かるように、「哲学」を支え、それを基礎づけるものとして位置づけられる。「純粹経験を唯一の實在としてすべてを説明して見たい」という『善の研究』の「哲学」としての企図は、「宗教」の次元にまで話が進められることによって、はじめて完結する。その意味で、ここでの「宗教」は「哲学」と親和的である。また、「哲学」と区別された「宗教」固有の問題が問われることがないという点で、「哲学」の範囲内の「宗教」とみなすことができる。

それに対して、第四編の「宗教」においては、むしろ、「哲学」に余るものとしての「宗教」の姿が見られる。「自己」が有限相対の自覚をもち、「宗教的要求」を起すということも、

「哲学」の範囲内で考えられる事態ではない。「哲学」の側では、「すべてを説明」という企図のため、あくまでも宇宙と一つであるような無限の「自己」が出発点に置かれるが、第四編の「哲学」に余る「宗教」においては、「哲学」的な説明のための有用性ということとは別に、現にそのような無限なる「自己」ではありえていない、一人一人の現実の「自己」が切実な問題として出発点に置かれる。

『善の研究』の読者の中には、単に「哲学」の範囲内にとどまり、「すべてを説明する」ということのみに全関心を注いでしまう者もいるかもしれない。そういうあり方に対して、「第四編第一章」は、「哲学」に余る「宗教」の立場から、一人一人の「自己」の身上に問題を引き戻すものとして、『善の研究』全体の中でも独特の意義をもつと言いうことができるのではないだろうか。

後期西谷啓治の身体論

——大谷大学講義より——

小野 真

西谷啓治は、晩年の大谷大学講義（以下『講義』）において、彼独自の生命論、およびそれに基づく身体論を展開している。西谷の身体論は、「空」の思想と並ぶ大きな問題であるにもかかわらず、永らく地下鉅脈のように姿を潜め続け、『講義』において漸く姿を現わしてきた、との指摘がなされている。この西谷の身体論はどのようなものであろうか。

『講義』で現れた西谷の身体論の鍵概念は、self（「それ自身」、「自己」、「自性」等とも表現される）である。昭和四十六年度講義で初めて現れ、最初は粗削りで試行錯誤的に規定されているが、次第にその本質が明確にされていき、『講義』全体の通底音となっている。selfとは、「生きている物」の特別な在り方を指すものであり、「生」の概念といってもよい。さしあたって、selfは、「体の中に滲み込んで生きて働き」、「個物を個物として成り立」たせている、生きているという在り方そのものであるが、「部分を持ち寄っていくらそれを結び付けても本当の全体にはならないような仕方」での全体的で organic な統一を実現している。また、organic な統一の過程において、生き物が水や空気、食物を摂取することによって他の生物と繋がっている側面も、selfそのものを成り立たせる基盤でもある。

昭和五十年年度講義では、対象化できない act（作用）である self が、身体そのものに滲透しつつ、生き物を生かしている事柄がさらに発展的に次のように語られる。「生物が生物そのものとしてそこで成り立っている処」、生命の「一種の中心のよな処」である self は、生物の体という「形有るものの全体の何処にでも行き渡っていて、しかもそれ自身は形をもたない」。そういうものが「生物体の構造」の中に含まれているが、身体はそういった self の「直接の環境」ないし「第一次環境」である。身体には生命そのものが端的に現れているが、身体は一面 self が外の環境を自分の物にしてしまったような「内的環境」でもある。つまり「self そのものがそこへ自分を直接に